

乳児保育の諸問題

津 守 真



これまで教人の方々が、乳児の精神発達について、最近の基礎的な研究成果をもとにして書いてこられた。あるいは難解と感じられた方があったかもしれないし、このような基礎的な研究資料が、幼児教育とどのような関係があるのか、いぶかしく思われた方があるかもしれない。しかし、乳児期は幼児期に先立つものであって、幼児の問題を考えるに当たっても、ぜひ理解しておかなければならない

ものである。また、幼児教育において必要とされるコツを乳児期の保育の中にも見出すことができる。基礎的な研究資料が、実際の保育とどういった関係があるかということについても、私もは一考しておかなければならない。乳児にしても、幼児にしても、実際面での子どもの扱いや保育に関しては、世間的な常識論で処理されてしまふことが多い。そして、ある人は、厳しくしつけよと言い、ある人は、そうではないという。いずれも常識論が多くて、子どもの実態にそくし、専門的な研究にもとづいた論議が少ないのである。しかし実際保育こそ、子どもに直接にふれるものであるから、常識論で処理せずに、根拠をもとめ、よりよいやり方を研究しなければならぬ。発達に関する基礎資料は、実際保育に根拠を与え、原理を示してくれる上で重要である。

他面、保育の問題は、基礎資料から得られるのとは別個の、独自の課題をもっている。それは、具体的な子どもについて、具体的な場面での問題であるから、常に動いている、一個の人間にぶつかっている。子どもに環境を与え、教材遊具を用意し、おとながある接し方をして、子どもがどのように動くかを観察しながら進む過程である。この過程は、乳児でも幼児でも共通である。たゞ、その内容を異にし、子どもの反応を異にするのみである。

いま、乳児保育の問題をとり上げるに当って、精神発達の一般的な経過と、一般的原理の上に立って、保育上の問題をとりあげてゆきたいと思う。

また、ここでは、乳児というのを、だいたい生後一年くらいまでとしておきたいと思う。それは、従来の諸論文がいずれも、一才くらいまでを主対象として述べられているからである。ふつう、保育所などで乳児保育というと、むしろ、一、二才が対象となるようであるが、ここでは、一才以前のところと考えていただきたい。

一、精神発達にもとづいた乳児保育の原理

第一表に示すのは、私どもが、乳児の精神発達について研究した際のまとめの表である。^(注1)

私どもは、家庭の日常生活の場面で、乳児の行動が変化してゆく

状態を発達のにとらえようとした。乳児の行動の発達の变化は、短期間にも容易に観察できるものであるが、故人の乳児を出生直前から定期的に観察し、また母親にその発達の变化を記録してもらって、家庭生活場面で共通にみられるような行動を集めた。それからこのような行動か、多くの乳児についてどのような頻度でいつごろみられるかを、母親に面接質問して調査した。便宜上、運動、探索・操作、社会、食事・排泄・生活習慣、理解・言語の五つの側面にわけて、行動項目を整理した。各側面について、発達のあらわれる順序にしたかって、行動項目を並べると、数か月を単位として、発達のな特性をとらえることができた。それをまとめて示したものが第一表である。いま、この表をもとにして、精神発達からみた乳児保育の問題点を指摘したい。

(1) 発達には順序があるから、そのときの発達課題を果すこと。

精神発達は、一定の順序にしたがって進行する。第一表に示してある段階は、どの子どもも、この順序で発達する段階である。どの段階かをとびこえて進むことはない。六十二卷一号の浅見の論文でも、この点は発達の原理として指摘されている。実際保育に当たって、

注1

津守・真・稲毛教子、乳幼児精神発達診断法
大日本図書、昭36

この原理は重要である。精神発達の順序をふんで、そのときに必要なことをせねばならないのであって、段階をとんでずつと先のことを期待してはならないのである。あまり先の段階のことを期待されると、子どもはいろいろの形で問題をおこす。乳児が自我を確立するためには、乳児期からその段階のことを期待されることが必要である。

(2) 発達の個人差を尊重すること

発達段階の順序は、どの個人にも共通であるが、いつころの時期に次の段階にうつるかということについては、個人差が大きい。だから、何か月になったらどのような行動があらわれるというようなことを、あまり断言していうことはできないのである。乳児期は、どの子どもも、比較的発達の速度が早いので、同じような時期に同一の行動があらわれるようにみえることが多いのであるが、幼児期になると個人差はもっと著しくなる。そして、個人差のあることが当りまえなのであって、ある行動の出現が多少早くてもおそくても、それは正常な発達なのである。だから、実際保育に当たっても、保育者は子どもの個人差に寛容でなければならぬ。どの子どもも一様に、同じことを期待してはならないのである。

(3) 乳児は、無力な存在であるから、保護することが必要である。

乳児は、ごく無力な存在である。ことに、最初の半年間は、乳児

は受動的であり、外から与えられるものをうけている面がつよい。運動面でも、最初におかれた姿勢に適應するところからはじまる。

知的な面でも、聴覚や視覚の刺激に気がつくという受動的な段階であり、自分で意図的に行動するのは、四、五か月から以後である。

浅見の発達の原理でもわかるように、人間の乳児は実に無力であって、保護されることを必要としている。乳児保育の基本原理は保護であり、乳児の必要とするものをとおなが与えてやることが要求される。また訓練の段階ではない。乳児の要求するものを、おとながみたしてやる必要がある。姿勢をかえてやること、握めるものをそばにおいてやること、笑いかけてやること、乳を与えてやること、おむつをかえてやることなど、いづれも、乳児自らの力ではできないことからである。そしてこのようなことをしてやらなければ、乳児は生後そのものが不可能であるし、発達も十分に行なわない。

(4) 乳児は、十分に乳を吸う経験が必要である

乳児の初期においてはとくに、乳を吸うことが外界との接触の通路として重要である。乳を吸うことは、栄養をとるということ以上の意味をもっている。乳を十分に吸うときには、乳児は外の世界を満足なものとして体験する。乳がなかなか与えられなかったり、乳が十分に出なかったり、その他不快な経験を伴うときには、乳児は

第1表

発達段階 (0~3才まで)

36	運	• 36.69 三輪車にのってこぐ	• 36.59 絵らしいものを書く	自己統制	
30	動	• 30.65 すべり台にのぼりすべる	• 30.55 のりもまをこごこ		
24	技	• 24.63 両足でとぶ	• 24.53 積木を横に2つ3つ並べる		
21	能	• 21.60 つまさきで歩く	• 21.49 紙布などを包んであそぶ		
18			• 18.43 砂いじりを好む	相	• 24.42 ほしいものがあんな
15	完成歩行の	• 15.47 2,3歩ひとりで歩く	探索		• 21.34 母とまごとのまねをする
12		• 12.43 手をついて立ち上る	• 12.35 鉛筆でめがきく	五	• 18.32 困難に出会うと助けを求め
11	協応動作のための	• 11.38 つたい歩きする	• 11.34 ふたをあけたりする	交	• 11.22 物などを相手にわたす
10		• 10.33 はいはいする	• 10.31 戸をあけるこ	渉	• 10.21 いけうとせんと親の顔をみる
9	努力動の	• 9.26 腹ばいにする	• 9.30 引けていろを引出す		
8		• 8.19 あお向きからうつ向きがえりする	外界		
7	積極的	• 6.15 しばらくの間支えなっている	• 7.25 たんすの取手やイヤ遊	探	• 7.16 要求があるときおとをひく
6	身体統制		• 6.19 そばんで新聞を引る	索	• 6.14 母親と他の人との区別がつかない
5			• 5.16 玩具をさだめて出す	有意的操作	• 5.12 知らない人がかかわる
4			• 4.12 自分とみつめる	受動的	• 3.6 そばを歩く人を目で追う
3	受動的	• 3.7 腹ばいにする	• 2.7 きげんはより	反	• 2.3 あやす顔
2	身体統制	• 2.5 立ちまわらない	• 1.3 物音にビクとする	応	
1		• 1.1 ね首をかえる			
月令	運動		探索・操作	社会	

生後半年以前は、たれでもよいから、おとなか接触することが必要である。半年以後では、特定の人に差別的に反応するようになるから、特定の人が世話をすることがとくに必要である。人的接触の欠如かホスピタリズムを生む。特定のおとなが愛情をもって世話をするということが乳児保育の基本原理である。

(6) 乳児は外界に対して積極的に向かってゆくので、安全な環境を備え、探索の経験を豊富にすることが重要である。

生後、二、三か月たった乳児は、快く目をさましたあとや、乳をのんで満ち足りたあと、あたりをみまわし、光や影の動きをしっかりとみつめ、物音や人の話し声に耳を傾ける。そして、手足をはたはた動かし、ウクンウクンと声を出す。これは遊びのはじまりである。

最初は時間的にも短いが、だんだんにこの時間が長くなる。健康で正常な乳児は、このようにして、外の世界に自然に興味をもつようになる。乳児のこのような生活はたいせつにせねばならないので、快く外界をたのしんでいるときに、乳の時間だからというようににとであらあらしく抱き上げたりして、その静寂を破ってはならないのである。

四〜五か月になると、乳児は目に見えたものを手で掴まえようとする。これが、自分で目標をもって、その目標に到達しようとする行動のはじまりである。それから、おとなのみている新聞をひっぱ

って破いたり、さらに進むと、ひき出しをあけて中のものを出したりなど、いわゆるいたずらかはげしくなる。

このように外界に対して、積極的に向かってゆく力は、発達する生活体にもともと備わっているものである。この外界に対する積極性が知的活動の発達の基礎である。何にでも興味をもって探索するところから、外界の物の性質を知りようになり、それを素材にして作ったり考えたりするようになる。

だから、乳児がいろいろの刺激をたのしんでいるときには、それに干渉しないこと、そしてまた、積極的に進出してきたら、いろいろの「もの」にふれ、いたずらをさせ、経験をひろげることが必要である。それには、いたずらをしても危くないような、安全で豊富な環境を用意することが重要である。

(7) 声を出し、話しかけられる機会を豊富にもつこと

村井の論文(62巻11号)が示しているように、乳児は快いときに発する音は、いろいろの種類の音がふくまれている。不快な時の泣き声は、音の種類も少ない。いろいろな音を発するというのが言語の基礎であって乳児が快いときに声を発する経験はたいせつにせねばならない。また、いろいろの音の声をきくことによって、乳児の発声は刺激され発する音の種類も豊富になるから、乳児には話しかけられる経験も重要である。そして、「語はとくに音声だけの問題

てはなくて、対人関係の問題であるから、乳児の世話をする特定の人か、その特定のひとりの乳児に、愛情をもって、話しかけ、笑いかけ、表情をもって接することが、言語発達の上でも重要な役割をはたすのである。

二、乳児保育をめぐる二、三の問題

家庭保育か施設保育か

最近でも、家庭で母親が育てるよりも、病院で育ててもらった方が栄養的にも、衛生的にも理想的だと考えている母親がいる。そして、夜泣きするとか、お乳をのまないと入院させた方がいいと考える。しかし、病院にいれることによってこのような問題は解決しない。たとえ一時的には変化したようにみえても、乳児の生活全体からみるときに、病院生活で乳児の発達は向上しないのである。前に述べた乳児保育の原理も、ふつうに病院生活ではみだされない。

精神発達の面からみれば、乳児は家庭保育を主とすべきであって施設保育はやむを得ない場合に限られることは、すでに明らかであろう。まして、乳児の問題は、発達の面からだけ考えられるべきものではなく、家庭生活全体の立場から考えねばならない。手のかかる乳児期に、子どもとともに喜びや労苦をわかち合うところに、家

族としての成長がある。乳児期には家庭保育を主体と考えるべきものである。

それでは、母親が働いていて具々家庭の場合には、乳児はどうしたらよいかという問題がある。前述の乳児保育の原理に照してみると、どうしても乳児は母親代理者を必要とする、それが祖母であれ、他人であれ、特定の人か世話をするということが重要である。現在の乳児施設で、それが困難であるならば、家庭で母親代りの人が世話をするのがよりよいということになる。それが得られない場合には、乳児施設を考えねばならないし、乳児施設でもっと多くの保育が得られるようにし、乳児のひとりひとりと個人的な接触が得られるようにすることは、緊急事である。

それでは、職業をもって社会的活動をしている婦人は、母親となるために、職業をやめるべきであろうか。すくには結論できない。ただ、上に示した原理がみだされるように、乳児の生活環境を用意せねばならない。そして、職場からかえって家庭人となったときには、母親としてできるだけ多く子どもと人間的接触をすることがたいせつである。甘やかしすぎはしまいかなどと心配せずに、子どもとの精神的交流することを主として考えるべきである。

なお、この問題については、精神発達以外の、いろいろの要因を

考えなければならぬから、職業人を選ぶか、家庭人を選ぶかをきめるのには、精神発達の面からの考察だけでは不十分であることをつけ加えたい。そして職業人としての使命と意欲をもった婦人を、幼児教育界は必要としているのである。

三、乳児の保育現場の研究

家庭で母親が保育する場合も、施設で保育が保育する場合も、保育者として乳児に接する態度には共通のものがある。次に乳児保育そのものもつ保育上の問題について少しく考えてみよう。日々乳児と接する生活は、一見単調のようにみえるが、保育者の内面生活も単調で機械的になってしまつたら、そこには乳児保育の向上がない。そのときには、乳児の生活もまた発展性を欠いたものになってしまうだろう。しかし、もっとも急速に発達しつつある乳児とふれ合うところには、生活を豊かにするための工夫がいろいろと生まれ出てくるはずである。次に、いくつかの考察の材料を挙げてみよう。

乳児をおく場所の配慮

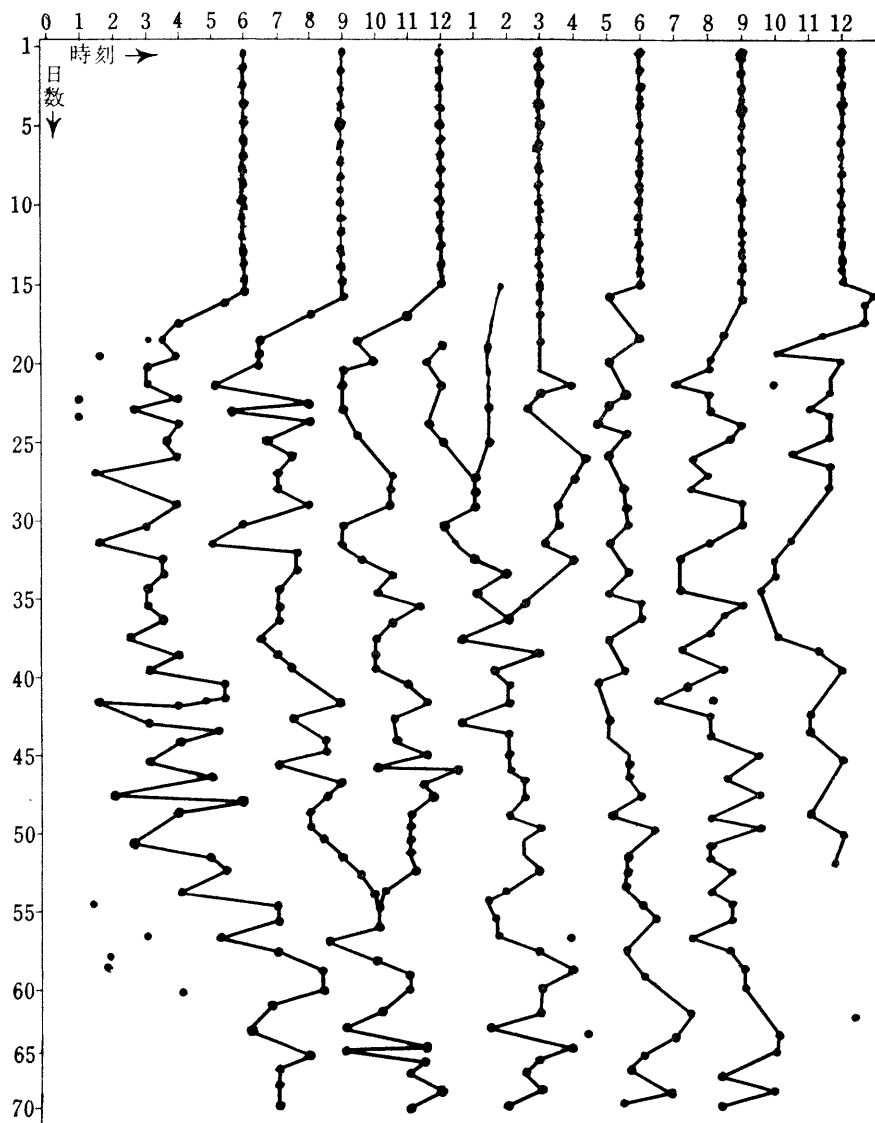
生後、二、三か月の乳児でも、明暗を識別し、動くものを目で追う。快いときには、光や影の動きをたのしみ、手足をはたはた動か

す。この頃の乳児に、自然に快適な刺激が与えられることは、乳児の感覚訓練としても適切であろう。あまり近代化された設備の中では、常に部屋は一定の明るさに囲まれていて、光の変化というものがない。乳児のベットを窓に近くし、太陽が雲でかげつたときには暗くなり、また陽が射せは明るさが増すような、風によって木の葉が動けばその影を目で追えるような、そういう場所においてやることは、初期の乳児にとつても快いことであろう。このようなところにも、現場保育の研究がある。

材料提示の工夫

五か月くらいになると、乳児は、ものにふれようとして手を動かす。そのころの母親は、ガラガラなどをふってみせたり、握らせてやったりするのが普通であろう。ガラガラを頭の傍においてやっても、このころの乳児はそれをとることができない。もうすこし掴みやすくするためには、ハットの上にひもやコムひもをはって、それにカラカラをむすびつけてやる。そうすると、乳児はガラガラをもっとよく見ることが容易であるし、手をのはしてつかみやすくなる。それから、カラガラをどこかに落してしまうことがない。くりかえして何回もゆらして音をたのしむことかできる。

目で見たものに手をのばしはじめた初期には、頭の真上にカラカ



第1図 Tの授乳時間の変化——自己充足授乳法による（生後70日まで）
 生後15日目まで病院で定期的に授乳
 帰宅後は自然に授乳時間が安定した様相を示している。
 16日目から、哺乳量も急激に上昇した。

ラを吊したのではうまくつかまえることができない。乳児が自分の手とガラガラとを同一の視野の中でみることができ、手とガラガラとが近づいたり、はなれたりするのを自分の目でみることができ、ならば、見たものをつかまえることはもっと容易であろう。乳児は片方の手をたいがい横にのばしているし、頭もその方に向けていることが多いから、ガラガラを吊すのにも、はじめの方に吊した方が手と同一の視野の中で見る可能性が多くなる。こんな試みをしてみると、たしかに、乳児は目と手の協応動作をよく発達させるようである。

乳児の要求の中に秩序を発見する

授乳の時間が乳児によって個人差があることはよく知られた事実である。そして、いろいろのその時の状況によっても、多少、時間間隔が長くなったり短くなったりする。乳がほしいときには、乳を探す動作があるので、母親や特定の保育者ならば、乳児の空腹の徴候をみることは困難ではない。乳をのまないで困った乳児が乳児の側の状況を親が察知してそれに合わせて授乳するようにしたら乳をのむようになるという例も少なくはない。そして、乳児の側の要求は、発達とともに変化して、その生活のリズムは自ら発達的变化をとげる。このことは、子どもの生活の中に、おとなが期待するの

とは違った秩序があることを示すものである。

第一図は、ある乳児の生後二か月間の授乳時間の変化を示したものである。

病院にいる間は、きっかりした時間授乳で、この間は哺乳量も少なく、医師から注意を受けている。家に帰ってからは、時間にとらわれずに、乳児の空腹の徴候に応じて授乳した。その結果、哺乳量は急激に上昇した。授乳回数も自然に減少し、時間も次第に一定時間に安定してくる状態を図からみることができよう。この変化の状況は、個人によって異り、他の乳児ではまた別の形を示す。人工的に作った規則に従わせるのではなく、生活体の中にある秩序を発見してそれに従うところに、母子の生活を円滑にする保育がある。

以上に、ごく二、三の保育現場の研究問題を掲げたのであるが、乳児保育にも、なお多くの研究課題があろう。乳児保育者の研究に期待したい。

☆

☆

☆

☆